

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

4

■ 第3章「制御不能」

3月13日朝までに、福島第2原発の緊急時対策本部に座る所長増田尚宏(53)の前に、官邸との専用電話が置かれた。前日朝に首相の菅直人(64)が福島第1原発を訪問したことを受け、東京電力が本店経由で第1、第2原発にホットラインを設置したのだ。13日前11時ごろ、その電話が鳴った。増田が取ると、相手は「総理と代わります」と言った。

「菅だな」

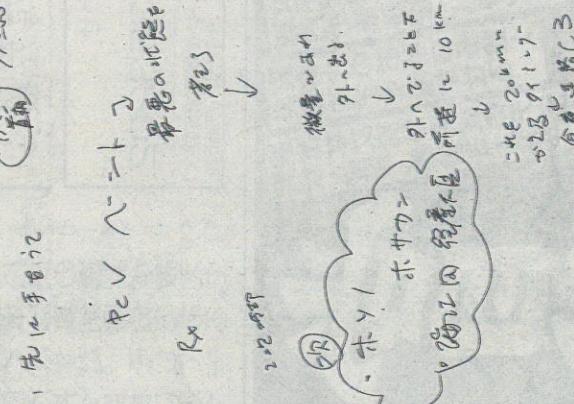
増田は手元にあつたA4の紙に熱除蒸系)と呼ばれる装置の復旧「カン首相」とボールペンでメモを急いでいることを説明した。じた。

「大変、お騒がせしております」に言つてくれ」といふ前に菅が尋ねた。「状況はどうなつてゐる」

増田は1、2、4号機の圧力抑制室で圧力が高まつてゐること、ベントをせざるを得なくなるタイミングリミットが14日未明に迫つてゐること、現場ではベントの回避こうに頑張りますが、やる時にはじめに冷温停止を目指してRHR(残留

官邸からの電話

ベント連絡「早めに」



13日、菅首相との電話の内容を書き留めたA4の紙

「ベントをするんだつたら早めに言つてくれ」といふことを説明した。「分かりました」

「早くに言つてもらわないと、避難する人とかエリアとか決められないのでから」

もう少しもだつと増田は思った。「分かりました。ベントしないよつかりります」

「早めにへだぞ」。菅は念を押した。さらに、菅が事故発生後に

プレーントとして呼んだ専門家が電話を代わつた。「復水器をなぜ使ひRHRが作動し、冷却が再開した。

多くの津波に遭い、復水器に水を送るポンプが使えなくなつていて、原発は危機的状況を脱じ、この後、これを説明した。

だつた。菅には増田との電話の記憶がないという。専門家の意見を伝えるため、電話を仲介したことはあるかもしないが、日時が違うはずだ。当時は第1原発の対応に精いっぱいで、第2原発のベントで議論になつた記憶もない」。

1、2、4号機ではこのごろ、ベントに向かた作業が最終段階に入り、あと一つ弁を開ければベントができる状態になっていた。

13日午後1時半ごろ、RHRの復旧に向け総延長9キロの電源ケーブル敷設が完了した。本来は約2

00人でも4~5日かかる作業だが、彼らは1日でやつてのけた。1号機で14日前1時24分、RHRが作動し、冷却が再開した。

想定されたベントのタイムリミットまであと約2時間だった。第2号機が冷温停止した。

だが対照的に第1原発の状況は、電話は第1原発所長の吉田昌也(56)にもかかってきたが、増田称略。年齢、肩書きは当时。共同通信にかかってきたのはこれ一度だけ 信 小野田真美)